

## コクトー 日本を去る

### —— ジャン・コクトーの日本訪問（6）

西川正也

昭和 11（1936）年 5 月 16 日、フランスの詩人ジャン・コクトーは秘書マルセル・キルとともに神戸の港に降り立った。それからの約一週間に及ぶ滞在の間にコクトーは歌舞伎や相撲見物、明治神宮や歓楽街の探訪などを通して日本と日本人の姿を観察し、詳細な旅行記をフランスの新聞のために綴ることになった。

またコクトーはこの滞在の間に、日本語版の自分の著作からイモリの黒焼にいたるまで多くの品々を旅行鞆の中に詰め込むことになるのだが、そうした日本土産の中でもことに詩人の気に入ったのは帝国ホテルに同宿していたアメリカ人から贈られた一匹のクツワムシであったという。

#### 1 ミクロビュス

東京で、あるアメリカ婦人が籠<sup>かご</sup>にはいったコオロギを私に贈る。パスパルトゥ〔秘書キルのこと〕がこれにミクロビュスと命名する。ミクロビュスは夜になると籠を出る。魔法瓶の上で眠り、身体の一部をなしている緑色の長いギターをうっとり弾きこなす。

1)

この虫についてコクトーは「コオロギ cricri」と書いているが、一方、通訳として詩人に付き添っていた堀口大學は「くつわ蟲」であったとしている。「緑色のギター」というコクトーの描写から考えればおそらくその虫は「クツワムシ」であったと思われるが、そもそも「クツワムシ」がフランスには存在しないため、コクトーは「鳴く虫」というような広い意味で「コオロギ」と表現したのかもしれない。

また「ミクロビュス microbus（マイクロバスの意）」という風変わりな名前については、虫の形が「<sup>ばいきん</sup>黴菌microbe」が大きく成長したもののように見えたことから、実はキル青年ではなくコクトー自身がつけたものであったという。コクトーは竹製の虫籠をアクロポリスの神殿に見立てて喜び 2)、籠を振っては話しかけたり、自分の好物である苺を餌として与えるほどにこの虫のことが気に入っていたのだった。

寝る時にもクツワムシのはいった籠を手元から離さなかったコクトーは、一晩中鳴きやまない虫の声に悩まされながらも眠れない床<sup>とこ</sup>の中で一篇のおとぎ話を思いついた。コクト

ーが翌朝、興奮しながら堀口に語って聞かせたその物語は、中国のある皇帝に始まって、様々な人の手を経た後にコクトーに飼われることになった一匹のクツワムシについての長大な幻想譚であったという 3)。

この物語は堀口の記憶の中に留まるばかりで結局、作品として残されることはなかったが、コクトーはそれに代えて、「チャプリンを喜ばせるために作った」4)というコオロギに関する短編<sup>コント</sup>を旅行記に挿入している。この物語の中で描かれているのは日本の天皇と、主君に話しかけることさえも禁じられているその臣下達とが繰り広げる、一匹のコオロギをめぐる騒動であった。もちろんこの諷刺に満ちた短編には昭和 11 年の日本の、天皇を絶対とする厳格な社会の在り方に対するコクトーの冷めた視線が、やや誇張された形ではあるにせよ投影されていたと言っても良いであろう。

やがて東京での滞在を終えたコクトーは横浜のホテルで一旦、休息を取った後、アメリカ行きの船に乗り込むことになる。その際、横浜に向かう自動車の中でも、ニューグランド・ホテルから港へと向かう途中でもコクトーは虫を入れた籠を決して他人には渡さず、膝の上に抱えて持ち歩いていたというのだから、この虫に対する詩人の愛着のほどは推して知るべしである。

この虫から放たれる驚くべき喧騒は、心をざわめかせる超自然的な何かを含んでいる。パスパルトゥは、この虫が自らの死を歌っているのではないかと自問する。なぜなら日本のコオロギは、白鳥のごとく、歌い疲れて死ぬと言われているのだから。

パスパルトゥが魔法瓶の取っ手にかけていた虫籠を外し、〔船室の〕私達の寝台の間のテーブルに置く。私はチャーリー・チャップリンを呼びに行く。彼の肩の上でも、ミクロビュスはやめようとはしない。歌い続けている。(中略)一時間が過ぎた頃、神秘のバネが止まり、ミクロビュスが沈黙する。私達は互いに顔を見合わせる。彼は死ななかつたのだ。いたって元気である。彼の死はおそらく空虚さを残したことだろう。このうなる木の葉、この夜中の日本のテノールを、私達は決して忘れはしないだろう。5)

日本を出た後もコクトーはクツワムシをこんなふう<sup>いと</sup>に愛おしみ、籠に入れて、同じ船に乗り合わせたチャップリンの船室にまでたびたび見せに通ったというが、チャップリンの方では、そんな詩人の嬉々とした様子を次のように描写している。

「なかなか賢い奴でね」と彼〔コクトー〕は言った。「わたしが声をかけると、必ず鳴くんだよ」あまり彼が夢中になるので、とうとうわたしたちの話題になってしまった。「どうです、今朝のピルウちゃん〔クツワムシのこと〕のごきげんは？」と、わたしはいつも訊くことにした。

「どうもよくなってね」と、彼は<sup>しよくじ</sup>大真面目に答える。「いま食餌療法をやっているところ

ですよ」(中野好夫訳)6)

この旅行から三十年近くを経た後に出版した『自伝』の中でもこうして紹介したくなるほどに、チャップリンにとってコクトーの熱中ぶりは微笑ましく、また印象に残るものであったのだろう。しかもアメリカに着いた後に詩人が取った行動は、そのチャップリンをさらに驚かせることになるのだった。

サンフランシスコへ着いたとき、わたし〔チャップリン〕は、迎えに来ていた車で、ロサンゼルスまで一緒に行かないかと誘った。ピルウも一緒だった。ところが、ドライブの途中で鳴きだしたのだ。「ほら、こいつ、アメリカが気に入ったらしいよ」突然、彼は車の窓をあけたかと思うと、小さな虫かごの口をあけて、ピルウをはなしてやった。

わたしは驚いてたずねた。「なぜ逃がしてやったのかね？」

「ピルウに自由を与えるのです」と通訳〔秘書のキル〕が言った。

「しかし、見知らぬ国でひとりぼっちにされて しかも、ピルウは英語が話せないんだよ」

コクトーがぴくりと肩をすくめた。「利口者だからね、英語くらいすぐおぼえるさ」  
(中野好夫訳)7)

時として過剰なほどに自己演出を行なうコクトーはしばしば同時代のフランス人達の批判の対象となったが、この時のコクトーの行動にも幾分かはその要素を見て取ることができるだろう。コクトー自身は旅行記の中で「〔大西洋を渡る〕イル・ド・フランス号の船上で彼が死んでいくのを見るにしのびなかった」8)からだと書いているが、チャップリンの前では素直にそうは言わず「自由を与えるためだ」と気取ってしまうところが、いかにもコクトーらしい逸話ではある。

## 2 横浜出港

マイクロバスに引きずられて日付がやや進みすぎたので、時間を少しだけ前に戻そう。

昭和11年5月23日の東京の新聞各紙はその前日の金曜日、22日の夕にそろって日本を後にしたコクトーとチャップリンについての記事を掲載した。例えば「東京日々新聞」の日刊は「コクトー氏去る / チャップリンとともに / 昨夕横浜出帆」という見出しの後に、次のような文章を続けている。

喜劇王チャーリー・チャップリンと世界八十日早廻り旅行のフランス文壇の巨匠ジャン・コクトー氏は廿二日午後六時横浜出帆のダラー汽船ピー・クーリツチ号でアメリカに向つた(後略)。

この記事は決して長いものとは言えないが、それでもその行間からは、すでに世界的に名を知られていた喜劇王チャップリンとコクトーとが当時の新聞ではほとんど同列に扱われていた事実を知ることができるだろう。もともとコクトーは日本で最も良く知られた海外の文学者の一人であったが、一週間に及ぶ滞在の間に数え切れないほどの人達と語り合い、連日の取材を快く引き受けてきたこのフランス詩人は、その滞在を通して日本での評判や知名度をさらに高めていたのである。

行く先々で熱烈な歓迎を受け、滞京中の動静をこと細かに報じられ続けたコクトーは、アメリカへと向かう船の甲板上でもやはり出航の間際まで取材の記者達に取り囲まれることになった。

出帆間際のP・クウリッチ号の甲板上で、最後の日本への感想を求められた時、コクトーは次の三つのことを答へた。

僕が一番痛感してゐることは、日本へもう一度、しかも最も早くかへつて来たいといふことだ。

来てみて、自分がフランスで考へてゐた日本が如何に誤解であつたかが判然<sup>はつき</sup>り解つた。

僕は、日本に就いて、軽い考へを抱いてやつて来た。それが今、日本に就いて、重い考へを抱いて去らうとしている。9)

これは通訳としてその場に立ち会っていた堀口が後に発表した随筆からの引用であるが、これらの言葉はコクトー自身の旅行記には記されていないとはいえ、コクトーの日本観の一端をうかがい知ることのできる貴重な証言と言っても良いものであろう。

日本に対してコクトーが残した三つの「感想」のうち、まず最初のものは「もう一度、しかも最も早く帰って来たい」というものであった。もちろんこの言葉には日本の記者達に対するリップサービスの要素も含まれてはいたのだろうが、「もう一度帰って来たい」というその思いは決して偽りのものではなかった。その後、日本の地を再び踏みたいというコクトーの願いが叶うことは結局なかったにしても、このフランスの詩人が日本に対していかに愛着を持っていたのかについては、これまでに発表した一連の論文の中で検討してきたとおりである。

日本に対するコクトーの「感想」のうちの二番目のものは「フランスで考へていた日本がいかに誤解であつたかがわかつた」というものであった。確かに、来日前のコクトーにとって日本とは浮世絵や小説などを通じてわずかに知っている世界の果ての国に過ぎず、日本人の船員達がキモノを着ているのを見て初めてそれが日本古来の衣服であつたことに気づく程度の知識しか持ち合わせてはいなかつたのである。日本に到着した当初、関西に

滞在した際のコクトーもまた、道行く人の見慣れない装束や女性の鬢<sup>まげ</sup>など、表面的なものに観察の眼を注ぐばかりであったことを思い出さなければならないだろう。

そして、日本に対するコクトーのそうした姿勢が劇的に変わったのは、やはり東京に移動してからのことであった。堀口大學や藤田嗣治という優れた案内役を得た詩人は彼らの助けを借りながら、日本人の内面や文化的な伝統、さらには頂点に君臨する天皇から無名の芸術家や遊郭の女達にいたるすべてを含む日本の社会の在り方にまで考察を加えるようになっていったのである。

世界一周の旅の間にコクトーが訪れた国は多いが、滞在の最初と最後で日本ほどに詩人の印象が変わった国を見つけ出すことは難しいだろう。ヨーロッパからインドまでの旅程は、じっくりと町や人間を観察するためにはあまりにも慌しいものであった。続いて訪れたアジアの国々は興奮をそそられる新奇な体験に満ちてはいたものの、そうした場所において詩人が足を踏み入れたのはかなり特殊な一角であったという印象が強い。また旅の最後に訪問したアメリカは、コクトーにとってはすでにそれなりの知識を持つ土地だったのである。

教養と熱意に満ちた案内人とともに一週間の時間をかけて見つめ続けた日本に対するコクトーの印象のこうした変化は、そのまま三番目の感想「日本について軽い考えを抱いてやってきたが、重い考えを抱いて去ろうとしている」という言葉へとつながっていく。「重い考え」とは何か、という記者の質問に対して通訳の堀口は「詩人の言葉です。説明すべきではないでせう」10)と答えたというが、おそらくその時のコクトーは「重い考え」という言葉を「厳肅で真摯<sup>しんし</sup>な認識」というような意味で用いていたのだろう。

世界一周の途上でコクトーが日本を訪問したのは、この詩人が再現しようとしたジュール・ヴェルヌの小説『八十日間世界一周』の旅において、主人公がたまたま日本に立ち寄っていたからという単純な理由によるものであった。しかしそうした「軽い」気持ちで訪れたはずの日本も、一週間に及ぶ滞在を通して様々な体験を重ねるうちに、詩人にとっては次第に「重い」意味を持つようになっていたのである。

日本でのコクトーは記憶に残る出会いと出来事とを数多く経験した。コクトーは日本においてそれまでに訪れたどの国よりも温かな歓待を受けるとともに、若き文学者や芸術家達とも親しく語り合う機会を得た。また一説には、日本訪問から九年の後にコクトーが撮ることになった映画『美女と野獣』の野獣の扮装には、この時に見た歌舞伎『鏡獅子』の影響の跡があるとも言われている。

もちろんコクトーがその独自の詩眼で観察したこの時代の日本は、好ましい面だけを備えた国というわけではなかった。二・二六事件から三ヵ月後にあたる街路の気配や、あまりにも厳格な秩序によって支配された社会の体制に対しては、コクトーは冷ややかな視線を隠そうとはしない。だとすれば、「重い考えを抱いて去る」とコクトーが答えたとき、詩人は、美しい面もそうでない面もともに内包した日本という国に対する錯綜した思いを抱

きながら、自分は今旅立っていくのだ、という気持ちを記者達に伝えたかったのではないだろうか。

プレジデント・クーリッジ号は横浜を6時に離れる。6時10分前、後ずさりながら私達を撮ろうとする写真家達に先導される形で、私はタラップを渡る。6時5分前になっても私はまだ〔差し出される〕カードにサインをしている。(コルネット、サキソフォン、トロンボーン、大太鼓からなる)船上のオーケストラが痛切な別れの音楽を奏でる。紙のテープが船と埠頭とをつないでいる。風がテープをふくらませ、断ち切り、もつれさせる。遠くで、新しい友人達がハンカチを振っている。11)

横浜の港を離れようとするコクトーにとって、もはや日本は海の彼方の見知らぬ国ではなかった。そこは新たな友人達が日々の暮らしを送る、自分にとっては親しい土地のひとつとなったのである。

見送る側と見送られる側、その双方に忘れがたい思い出を残して、コクトーの日本滞在は終わりを迎えようとしている。上に引いた場面の後で、フランスの詩人とその秘書とは日本の新しい友人達に向かってハンカチを投げる。しかしそのハンカチは堀口ら、埠頭で手を振る人々には届かず、まるで『鏡獅子』の二羽の蝶が舞い降りて、海の上に羽をやすめる」12)かのように、波間に漂うばかりであった。

この章の最後に引用するのは、遠く去り行く船を埠頭から見送った後の堀口の言葉である。コクトーが描き出した出港の場面よりもさらに感傷的であるのは、憧れ続けた末にようやく会うことのできた「詩の友」コクトーに対する堀口の惜別の想いが、あまりにも強いものであったためなのだろうか。

動き出した船の甲板から、コクトーは、指先に振つてみた手帛を、波止場にゐる僕に向つて投げ与へた。手帛は風に流れて、海中に落ちた。悲しみにくづほれた一羽の鷗のやうに、僕の離別のルグレのやうに、白い手帛はいつまでもいつまでもコクトーの乗つた船を追つた。今でもまだ追つてゐる。太平洋の沖合はるかなあたりに。13)

### 3 帰国後のコクトー

日本を離れたコクトーは、ハワイを経てアメリカの西海岸に到着する。サンフランシスコやハリウッドを探訪した詩人は飛行機でロスアンゼルスからニューヨークへと移動すると、その地で四日間を過ごしている。大西洋を横断する客船イル・ド・フランス号によって世界一周の旅は締めくくられ、出発からちょうど八十日が過ぎた6月17日、コクトーは秘書のキルとともに無事フランスに帰国することとなる。

母国に戻ったコクトーは旅の間に書きためた原稿をまず整理すると、今回の世界旅行の

スポンサーである「パリ・ソワール」紙に手渡した。『私の八十日間世界一周』と題されたその旅行記は8月1日から9月3日までの間、数度の休載を挟んで同紙に連載されることになるのだが、ちょうどその夏はスペイン内戦が激化するとともに、ドイツではベルリン・オリンピックが開催された時期でもあった。初めのうちは一面に掲載されていたコクトーの旅行記がやがて中面の目立たない場所に追いやられることになった背景にはこうしたヨーロッパの政治、社会情勢の変化があったのだが、もちろんコクトーにとっては自分の原稿に対するそうした扱いは満足のいくものであるはずはなかった。

この旅行記に先立つ二年の間に、詩人は新聞社の求めに応じて文章を連載するという形で二つの作品（『記念写真』『少年時代を再び』）を完成させている<sup>14</sup>）。コクトーの少年時代や青年期を彩った人々との思い出が鮮やかに綴られたそれらの頁はベルエポックのパリの絢爛たる「記念写真」の趣を持ち、好評をもって読者に迎えられていた。しかし続いて詩人が発表した『私の八十日間世界一周』は、時として文明論的な考察をも含む優れた世界観察の記録ではあったものの、胸躍る冒険の物語を期待していたであろう読者の人気は前二作ほどには得ることができなかったのだ。

その年の秋にコクトーはキル青年とともに南フランスの友人宅に滞在して、新聞に掲載された文章の手直しを進めている。大幅に改稿された旅行記は翌1937年の春、『僕の初旅八十日間世界一周』という題で出版されることになったが、コクトーの1930年代中盤を彩っていたジャーナリズムの世界における盛んな執筆活動は、実はこの本の刊行以降、次第にその勢いを失っていくことになるのだ。

コクトーの「ジャーナリズム時代」の最後の成果のひとつがこの『八十日間世界一周』であったとすれば、もうひとつの結実はあるボクサーとの出会いによってもたらされたものであった。1902年、コクトーの誕生日と同じ7月5日にパナマに生まれたアルフォンソ・ブラウン（通称パナマ・アル・ブラウン）は世界チャンピオンにまで上りつめるが、1934年6月の防衛戦に敗れたのをきっかけにボクシングの世界を去り、やがてパリ・モンマルトルに暮らし始める。キル青年の紹介でこの元世界チャンピオンに会ったコクトーは、当時ある楽団の司会者をしていたブラウンにたちまち魅了され、彼のリングへの復帰を助ける決意を固めることになる。

無謀ともいえるこの試みに詩人が乗り出した理由について、その評伝作家キムらは、「コクトーが日本において、大衆とは『テクニクに喝采を送り、感傷的な事柄よりもむしろ困難を克服する努力の方に惹きつけられる』存在であることを知った」<sup>15</sup>）からだと書いているが、おそらくこの説は正しいだろう。コクトーは歌舞伎『鏡獅子』を見ながら日本の観衆が、芝居の成功という最終的な結果よりもそれが達成されるまでの過程や、そこで発揮される技術にこそ惹きつけられることがあるのを感じ取っていたからである。

もちろんこの時のコクトーにはアル・ブラウンがカムバックに成功し、さらにはチャンピオン・ベルトを奪還できるかどうかなどわかるはずはなかったが、それでも詩人は周囲

の嘲笑などまるで耳にはいらぬかのようにこの計画に熱中していくのだった。ブラウンの後見役を買って出たコクトーは、まず友人のデザイナー、ココ・シャネルに頼み込んで資金の援助を約束させる。この時期のコクトー自身は依然として慢性的な阿片中毒の状態にあったのだが、シャネルの資金を使って詩人がまず行なったのは麻薬中毒のブラウンのための解毒治療であったというのだから何とも皮肉な役回りと言えるかもしれない。

それはともかくとして、やがてブラウンがトレーニングを再開するようになる頃には試合のためのプロモーターも見つかり、元世界チャンピオンのリング復帰への計画は順調に進み始めた。一方でコクトーはジャーナリストとしてのペンをふるい、ブラウンを賞賛する記事を発表して側面からも彼の援護を行なっていく。例えばコクトーは「アル・ブラウンの奇跡」と題する記事の中で1937年9月9日に行なわれた復帰戦の模様をこんなふうを描写している。

そして突然、その時がやってくる。雷が落ち、虫が刺し、悪魔がその住処から躍り出て、蛇が襲いかかる。それはあまりにも速すぎて、詳述することができない。レジス〔相手ボクサー〕がぐったりとなって崩れ落ちる。16)

カムバックのリングを見事に1ラウンドKOで飾ったブラウンはその後も勝利を重ね、翌1938年3月4日、激闘の末、ついにチャンピオン・ベルトを奪回するに至る。観衆はブラウンを「奇跡の黒人」と呼んで喝采し、コクトーもまた「アル・ブラウンは、心のあり方とボクシングとにおけるその天性の才能を極限にまで押し広げたのである」17)と書いて惜しみのない賛辞を送ったのだった。

しかしそのタイトル・マッチからひと月の後、最初の防衛戦の直前にコクトーは「アル・ブラウンへの公開書簡」と題する文章の中で突然、次のように記して人々を唾然とさせることになる。

#### 私の親愛なるアルへ

〔君は〕ボクシングを離れなければならない、私を信じたまえ。(中略)君はタイトルを奪還すると私に約束し、私はこの驚嘆すべき計画の最後まで君を助けると約束した。事は成ったのだ。(中略)一人の詩人が、あるボクサーが世界チャンピオンに復帰することを望んだ。再び世界チャンピオンになった以上、その計画は終わり、詩人の最後の句点<sup>ボワン</sup>がボクサーの最後の拳<sup>ボワン</sup>となるであろう(後略)。18)

実はこの「公開書簡」は、タイトルを獲得したことでそれ以上ボクシングを続ける気持ちのなくなったブラウンと詩人とが話し合った上で書かれたものであったのだが、そうし



た事情を知らない読者にとってはコクトーがなぜブラウンに引退を促すのかが理解できないのは当然のことであった。コクトーがこの後もペンをとって、引退がブラウン本人の意思であることを説いているのは、周囲から聞こえてくるそうした非難の声に答えようとしてのことであった。

また私達はここで、「最後の結果にもまして、困難を克服する努力の過程こそが魅力的なのだ」という、コクトーが日本で得ていた新たな視点にも思い至るべきであろう。復帰への困難な道のりはすでに克服され、あとは手にした成功を維持していくばかりとなったチャンピオン・ブラウンの状況には、おそらくコクトーはもはや大きな興味を持てなかったのではないだろうか。

4月13日、最初の防衛戦に勝利したブラウンは結局、そのままリングを去ることになった。関係者の多くはやがて莫大な金額が提示され、ブラウンは復帰することになるだろうと考えていたが、コクトーが予言したとおり「奇跡の黒人」はその後、二度とパリのリングに上がることはなかったのだ。

私は彼〔引退するブラウン〕を支持しました。皆さんも彼を支持してください。私はここで姿を消します。人には各自、順番があるのですから。19)

この言葉とともにブラウンを見送ったコクトーは、ジャーナリズムにおける一連の仕事にも結果としてこれで区切りをつけることになる。以降コクトーは依頼があれば文章を寄せはするものの、新聞や雑誌に長期の連載を持ち、まとまった形で記事を発表することはなくなってしまうのである。『八十日間世界一周』をジャーナリストとしてのコクトーの最後の著作とするなら、アル・ブラウンの復帰と引退とはコクトーのジャーナリズム時代を締めくくる最後の「句点」だったのである。

#### 4 旅の終わり

1937年から38年にかけてのコクトーはアル・ブラウン復帰の計画に熱中していたが、もちろんそれだけにかかりきりになっていただけではなかった。37年の初夏にコクトーは自らが翻案したギリシャ劇『オイディプス王』のオーディションに立ち会うことになるが、そこで詩人を待っていたのは一人の青年との出会いであった。その駆け出しの俳優の名はジャン・マレー。コクトー後半生の創作活動にとって欠くことのできない存在となるマレーは、この時まだ二十三歳であった。

コクトーが「ジャーナリズムの時代」から「演劇と映画の時代」へと移行していった背景には様々な理由がある。世界一周旅行という大きな仕事を果たし、その成果も本にまとめ終えたこと。アル・ブラウンの復帰と引退とを最後まで見届けたこと。ヨーロッパの社

会全体が激動の時期を迎え、政治的な事柄が作品に反映するのを嫌うコクトーの文章がジャーナリズムの世界で受け入れられにくくなってきたこと、等々。しかしそれらの中でも最も大きな理由として挙げなければならないのは、マレーとの出会いに魅了されたコクトーが、この俳優に活躍の場を与えるために戯曲や映画を次々と生み出そうと考えたことであつた。

役者としてはほとんど新人に近かったマレーに『オイディプス王』の中で大役を与えたコクトーは、続いて上演した『円卓の騎士達』(20)では、映画撮影のために出演できなくなったジャン＝ピエール・オーモンに代えて主役にマレーを抜擢する。これ以降、コクトーはマレーのために『恐るべき親たち』をはじめとする新作戯曲や『美女と野獣』に代表される斬新な映画作品を数多く制作し、マレーの方もそれに応えるかのように俳優としての人気と力量とを急速に高めていくのである。

コクトーとマレーとの親密な友情はこの後、1963年の詩人の死に至るまで続いていくことになる。コクトーが世を去った後、残されたマレーが1998年に自身の死を迎える直前まで敬愛する詩人について語り、演じ、また書き続けていたことは記憶に新しいところである。

一方、コクトーのジャーナリズム時代の掉尾を華やかに彩ったアル・ブラウンはタイトル・マッチの翌年にあたる1939年の初め、いよいよ戦争の影が濃くなってきたパリを後にしてニューヨークへと旅立っている。アメリカに戻ってからのブラウンの生活は恵まれたものではなかったようだが、1951年に結核のため、その地で波乱に富んだ四十九年の人生を終えることになった。生涯の戦績は151戦123勝(55KO)18敗10引き分けである。

八十日間の世界旅行をコクトーとともにしたマルセル・キルは、新たにアル・ブラウンやジャン・マレーがコクトーの生活にはいつてきてからも詩人の信頼を失うことはなかった。キルはフランスに帰国後、ある女流画家と相思相愛の仲になっていたが、1939年9月の第二次大戦の勃発とともに徴兵され、翌1940年、アルザスの前線でその二十八歳の命を散らすことになる。それはフランスとドイツとの間で休戦条約が締結されてから数時間の後のことであつた。

ジャン・コクトーの日本訪問と、その旅にまつわる人々の物語はこれで終わる。

しかし本稿を締めくくるにあたっては、コクトーにとって世界一周の旅とはどのようなものであつたのか、そしてその中で日本とはどのような意味を持つ国であつたのかという問題について、やはり考えておかなければならないだろう。

1936年3月28日にパリを出発したコクトーはローマとアテネを経てエジプトに到着する。ローマを「(地に沈む)重い街」、アテネを「(空に舞い上がる)軽い街」と形容したコ

クトーの詩眼は独特のものではあったが、列車や船の乗り継ぎ時間を利用して駆け足で名所をめぐるような毎日は詩人にとっては決して満足のいくものとは言えなかった。

エジプトでスフィンクスの神秘と対面したコクトーはスエズ運河を抜け、そのまま船でインドへと渡る。「アクロポリスやスフィンクスなどの前で肩をひそめてみせることは、耽美主義者の態度や<sup>スノビズム</sup>気取りであり、私はこれを拒絶する。私が好むのはむしろ（中略）これら<sup>いにしえ</sup>の景観を称賛する者、そしてそれらを新たな角度から称賛しようと努める者である」21)と綴ったコクトーは、立ち寄る先々でめぐり会う様々な事物に対して<sup>てら</sup>銜いのない眼を向けようとするが、本来なら旅の目的となるべきそれらの土地や人にではなく、むしろ「時間にささげられた」22)かのような急ぎ足の旅程に詩人は次第に不満を募らせていく。

私達はそれぞれの土地のわずかな<sup>へり</sup>縁の部分や、交通機関だけしか見られないので、この計画がとてつらくなくなる。23)

詩人がこう記したのはインドからビルマへと向かう船上でのことであったが、しかしその船がラングーンに到着するあたりから、コクトーの旅は次第に形を変えはじめることになる。詩人の旅が船での移動を中心とするものであることに変わりはないが、国と国、港と港をゆったりと結ぶ連絡船の速度にあわせるかのように、それぞれの寄港地でコクトーの過ごす時間が少しずつ増えていくのである。おそらくそれは詩人が意図して移動のペースを緩めた結果というよりは、次の船の出港までの間隔が偶然にそれまでより長くなったというだけのことであるのだろう。しかしたとえ意図したものではなかったとしても、より多くの滞在時間を与えられたことによって、旅の日々を綴るコクトーのペングにわかには生気を帯びはじめていくことには変わりはない。あるいは、コクトーにとっての本当の旅は、この時になってようやく始まったとさえ言うことができるのかもしれない。

では、そうして手にした時間を利用してコクトーはどのような場所を訪ね歩いたのであろうか。「美しいものは案内人が〔すくんで〕立ち止まるところから始まる」24)と書いたコクトーは、世界旅行の間にも危険な場所、一般の観光客が決して立ち入らない一角にまでしばしば足を踏み入れていた。そしてそんなコクトーにとっては、アジアの港はあまりにも刺激的な誘惑に満ちたものであった。ラングーン、ペナン、クアラルンプール、マラッカ、シンガポール、香港。幾度も船を乗り継ぎながらコクトーはこれらの港をめぐるているが、そうした街で詩人が訪れたのは場末の酒場や売笑街、いかがわしげな動物商の店など、通常の観光コースには決して含まれることのない場所であることも多かったのである。

それらの場所においてコクトーは鳥肌の立つような経験を何度も味わっているが、そうした体験の中でも詩人の心に最も深く刻まれたのは、滞在地が変わるたびに四度も繰り返された「阿片窟」の訪問であっただろう。旅行記の中でのコクトーの記述は阿片窟を訪れたことに触れる程度に抑えられているが、前にも述べたとおりこの時期、阿片の常用者で

あった詩人にとっては、機会を得たにもかかわらずその吸引の誘惑を断つことはおそらく困難であったに違いない。

危険な場所は常に寛大な歓迎と、最良の席とを惜しみなく与えてくれた。25)

これは詩人がシンガポールの阿片窟に足を運んだ際の文章であるが、日本に到着する前のコクトーにとってのアジアとは、これらの阿片窟に象徴されるような薄暗い闇と危険とをはらんだ刺激に満ちた場所にほかならなかったのである。

そして、そうした「アジア的なもの」の集大成ともいえる街・香港を離れたコクトーは、上海を経て日本へと向かう船の上でチャップリンと初めての対面を果たすことになる。

その五日後にあたる昭和 11 年 5 月 16 日、神戸の港に降り立ったコクトーが関西と東京で異例とも言うべき一週間の時間を過ごした後、横浜の港からアメリカに向けて出航するまでの詳細については、これまでに見てきたとおりである。

詩人を乗せたプレジデント・クーリッジ号はホノルルを経由し、やがてサンフランシスコに到着するが、そのアメリカにおけるコクトーの旅行記の記述は、次第に文明論の要素を行間ににじませていくことになる。ことにニューヨークに移動してからの文章は、機械文明の象徴であるその都会に対する称賛と反発や、そこに暮らす人々への共感と同情とがともに読み取れる興味の尽きないものとなっている。

度の過ぎた<sup>ごうしゃ</sup>豪奢は創造力を殺し、私達に名状しがたい<sup>メランコリー</sup>憂鬱を浴びせかける。26)

これらすべての有用な<sup>フォルム</sup>形、実際に利用されるためのすべての素材や建築物からは、ひとつの現実的な美が放たれている。その美とは、摩天楼ロックフェラー・ビルをピラミッドや〔インドの〕沈黙の塔やアクロポリスに類似させるものである。27)

無為も余暇も夢想もニューヨークには存在しない。この街はそうした贅沢を失ってしまった。そのことが精神的な仕事を困難にしている（後略）。28)

自分がヨーロッパという「旧世界」からやって来たことをはっきりと自覚しているコクトーの視線は時に鋭く、また時に驚嘆を交えながら「新世界」ニューヨークとその住人達の上に注がれていく。ことにコクトーのペンは、自分がかつてパリに移入しようと熱中した黒人達の音楽や、きらびやかな街路の奥の薄暗い路地を語るときには一層の熱を帯びることになる。

私は都会の<sup>たいひ</sup>堆肥を愛する。(中略)清潔なひとつの都会が宙に浮かんでいるが、その足

元には下水やごみ箱や不潔な地下室があって、上の街の幾何学的な魅力を<sup>はぐく</sup>育み、死からそれを救っているのである。29)

ハーレムは〔ニューヨークという〕機関のボイラーであり、足を踏み鳴らして踊る黒人達の若さは、そこに燃料を供給し運動を伝達する石炭である。30)

もちろんここに引用したものはこの街に関するコクトーの観察の記録の一部でしかないが、これまでに訪れたどの国よりも自分達に近い文化的な土壌の上に築かれ、自身でも良く知っていると考えていた場所であるだけに、詩人の言葉はかえって鋭利にその対象を切り取っているように見える。

そして、このニューヨークを最後の訪問地として、八十日間に及ぶコクトーの旅は締めくくられることになる。ヨーロッパからインドにかけての急ぎ足の旅と、阿片の匂いに包まれたアジアの港の巡行。待ち望んでいたチャップリンとの邂逅と、一週間の日本滞在。現代文明の象徴であるとともに黒人音楽の中心地でもあるアメリカ・ニューヨーク、そして懐かしきパリへの帰還。

詩人にとっての世界旅行をきわめて簡潔に要約すればこうした形になるのだろうが、コクトーが日本について残した記述をこの世界一周の旅程の中にもう一度置き直してみると、それらの言葉はより鮮明な意味を持つことになるだろう。

旅行記の中で日本のために充てられた頁を読む者が繰り返して目にするのは、日本とは厳然たる儀式と階級とによって支配された国であり、その秩序に反する者は自らの死さえも受け入れなければならない、というコクトーの見解である。おそらくこうした認識は二・二六事件からわずかに三ヵ月後であった日本の社会に対する観察から導き出されたものであるのだろう。しかしそれと同時に詩人は、例えば茶の湯を楽しむにも、芸者と宴席を共にするにも必ず定められた手順を踏んで進まなければならないという、日々重ねられる様々な経験を通してそうした感覚を身につけていったに違いない。

そしてコクトーが厳格な秩序と儀式とに支配された日本の在り方にこれだけ敏感に反応することになったのは、この詩人が日本に到着したのがアジアの諸港 猥雑で危うく、それでいて心地良い誘惑に満ちた街々を経めぐって来た、その直後だったためであることも重ねて指摘しておかなければならないだろう。コクトーが降り立った日本はそれまでに訪れたどの国よりも整然として、厳粛な空気の張りつめた場所であった。同じアジアにあってもそれまでの土地とはまったく異なる日本のこの姿に強い印象を受けた詩人は、東京での行動をともした堀口をして、こんなふうに語らせている。

例へば、今度の滞京中にも、日本に対する感想を求められると、彼〔コクトー〕は、日本は極めて、religieuxな国だ。」

と答へてみたが、これを聞いて、コクトオが「日本を宗教的な国だ」と観てゐるのだと大抵の人は思ふだらうが（そして思ふのも無理ないことだが）、しかし、それはコクトオの真意ではないのであつて、彼が言はうとする意味は、「日本は、生真面目な、厳肅な国だ」と言ひたいのである。それなら grave とか sérieux とかいふ言葉を使つたらいいやうなものだが、さう言つたのでは、詩人コクトオにはあんまりはつきりして含みが足りなくなるのであらう。彼は特に religieux といふ言葉を使ふのだ。31)

ここでは堀口は「religieux（宗教的な）」という詩人の言葉に「生真面目な、厳肅な」という意味を当てているが、前述したコクトーの日本に対する認識を考え合わせれば、この言葉にはさらに「(宗教の儀式のごとく) 儀礼と秩序を重んじる」という解釈も付け加えることができるだらう。別の場所でもコクトーは、天皇を頂点に戴く日本の社会の在り方を指して「義務の宗教」32)と呼んでいるが、この言葉もまた、いわゆる「宗教」そのものを意味するのではなく、天皇を崇拜することを絶対的な義務とする厳格な社会の体制を示すために用いられたものであることは言うまでもない。

「religieux」というコクトーの言葉に戻れば、日本に到着する以前に詩人が訪れたアジアの国々には「religieux」という形容詞が内包する「厳肅さ」や「儀礼、秩序」といった要素がなかったというわけではもちろんない。しかし、それらの街でコクトーが好んで足を向けたのが大使館や領事館の用意したお決まりの観光名所ではなく、現地の人間さえもたじろいでしまうような薄暗い裏路地であったことを考えれば、厳然たる秩序の保たれた日本の姿が、それらの土地とは鮮やかな対比をなすものとして詩人の心に強く焼きつくことになったのは当然であらう。

ただし、こうした見解は詩人が日本に対して抱いていた認識の限られた一面であり、堀口をはじめとする多くの日本人と語り合い、様々な場所を訪れるうちにコクトーの日本観がさらなる深みを持ち、多面的なものになっていったことはこれまでに検証したとおりである。

本稿を締めくくるにあたって最後に紹介するのは、コクトーが旅行記の中に残した<sup>オリエン</sup>東洋に関する言葉である。もちろんここに述べられた内容のすべてが日本のことを指していると言うことはできないだらう。例えば「高潔な悪徳」や「悪徳の高貴さ」といった表現は、コクトーがアジアのあちこちで訪ね歩いた阿片窟の光景からあるいは着想されたものであるのかもしれない。しかし、この文章が挿入されているのが日本出発の場面の直後であることや、「強力な美德」「すべてがひとつの法則に従っている世界」といった表現から判断すれば、その重要な部分はやはり日本についての観察から導き出されたものと考えてもよいのではないだらうか。

追伸

(前略)ヨーロッパでは、悪徳や犯罪の中にしか強さは存在しない。残念だが、そこでは美德は凡庸なものである。強力な美德は稀にしかありえない。そしてそれ〔強力な美德〕こそが真に聖なるもの、つまり詩人の、東洋の神聖さなのである。

(中略)東洋において驚嘆させられるもの、それは高潔な悪徳や、悪徳の高貴さであり、またそれが自然なものとなっていることである。強力な美德がその街路にはあふれている。それが詩人に対する敬意を説明してくれるだろう。そこでは詩人こそがナンバー・ワンなのだ。

衣服や衛生や髪形などの細部でさえもひとつの統辞法〔統一された法則〕に従っている世界にあっては、人々はどのようにして〔精緻な言葉の法則に従っている〕詩人の正確さを恐れることがあるだろうか。詩人は東洋の都市にあって、ようやく息がつけるのである。そこではすべてが、秩序をもって狂乱する〔儀式的〕祭列であるのだから。33)

## 注

1) A Tokyo une dame américaine m'offre un cri-cri en cage. Passepartout le baptise *Microbus*. *Microbus* quitte sa cage la nuit. Il dort en haut de la bouteille Thermos et joue à ravir d'une longue guitare verte qui fait partie de son corps. ( Cocteau, J., *Tour du monde en 80 jours ( mon premier voyage )*, Gallimard, 1936, p.191. ) なお本文中で引用するフランス語原文の翻訳は、特に注記のない限り、本稿筆者によるものである。

2)コクトーは世界一周の途中でアテネを訪れた際にも、車窓から見たパルテノン神殿を「子供達がバツタを入れておくのに草で編むような、小さな籠」と描写していた。( Cocteau, *ibid.*, p.28 参照。)

3) 『堀口大學全集』(小澤書店、昭和56~63年)、第6巻、293頁、「コクトーの見た日本」参照。

4) Cocteau, *op.cit.*, p.191.

香港から上海を経て日本へと向かう船の中で、映画についてコクトーと一晩語り明かしたチャップリンは、日本からアメリカを目指す旅でも詩人と同じ船に乗り合わせるようになった。チャップリンの『自伝』によれば、最初の熱烈な語らいの後、しばらくの間はそれ以上の話題を見つけられずに何となくお互いを避けるようにしていた二人だったが、そうした気まずさもいつしか消え、日本を離れる頃には親しく会話を交わすようになっていったという。一方のコクトーの記述によれば、アメリカ行きの客船では二人は自分達の個室とは別に、共用の船室まで借りていたとのことである。

5) Ce tumulte inouï sortant de cet insecte a quelque chose de surnaturel qui angoisse. Passepartout se demande s'il ne chante pas sa mort, car on raconte que le cri-cri

japonais meurt en s'exténuant à chanter, comme le cygne.

Passpartout décroche la cage qui pendait à l'anse du Thermos et la pose sur une table entre nos couchettes. Je vais chercher Charlie Chaplin. Sur son épaule, Microbus ne se dérange pas. Il chante. [...] Au bout d'une heure, le ressort mystérieux se bloque et Microbus se tait. Nous nous regardons tous. Il n'est pas mort. Il se porte à merveille. Sa mort aurait laissé du vide. Nous n'oublierons jamais cette feuille qui hurle, ce ténor japonais dans la nuit. ( Cocteau, op.cit., pp.193-194. )

6)チャップリン『チャップリン自伝 栄光の日々・下巻』新潮文庫、平成4年、394頁。

7)同、394～395頁。

8) Il ne pouvait s'habituer à le voir mourir sur l'ILE-DE-FRANCE. ( Cocteau, op.cit., p.213. )

9)『堀口大學全集』第6巻、299頁、「コクトオの見た日本」。なお本稿においては、原文で正体が用いられている場合でも原則として新字体に改めて引用を行なっている。

10)同、299頁。

11) Le PRESIDENT COOLIDGE quitte Yokohama à six heures. A six heures moins dix je traverse la passerelle précédé de photographes qui nous visent à reculons. A six heures moins cinq, je signe encore des cartes. L'orchestre du bord ( un piston, un saxophone, un trombone, une grosse caisse ) exécute la déchirante musique des adieux. Des serpentins relie le navire à l'embarcadère. Le vent les gonfle, les casse, les embrouille. Loin, nos amis nouveaux agitent des mouchoirs. ( Cocteau, op.cit., pp.187-188. )

12) Les deux papillons du KAGAMI-JISHI tourbillonnent et se posent sur la mer. ( Cocteau, ibid., p.188. )

13)『堀口大學全集』第6巻、299頁、「コクトオの見た日本」。

14)コクトー自身はこの時期の自分について、デビュー以来「長く続けていた眠りから、急に揺り覚まされたように茫然としていた」と述べ、その眠りの最後の作が戯曲『円卓の騎士』、眠りと目覚めとにまたがって書かれたのが『記念写真』、その状態からついに覚醒したのが世界一周の旅に出発した夜であったと記している( Cocteau, op.cit., p.20 参照)。今日から見ると、1935年から38年にかけての「ジャーナリズムの時代」はコクトーにとってはむしろ例外的な期間であり、この後のコクトーは再び夢の中で言葉や映像を紡ぎ出すような創作態度へと戻っていくことになる。

15) Cocteau a connu, au Japon, un public qui << acclame des techniques et s'attache moins aux sentiments qu'à certaines difficultés vaincues [...]>> ( Kihm, J.J.; Sprigge, E.; Behar, H.C., *Jean Cocteau, l'homme et les miroirs*, Editions de la Table Ronde, 1968, p.235. )

16) Et soudain la chose arrive, la foudre tombe, l'insecte pique, le diable sort de sa boîte,



le serpent frappe. C'est si rapide qu'on ne détaille pas. Régis devient mou et s'effondre. ( Cocteau, *POESIE de JOURNALISME*, Pierre Belfond, 1973, p.88. )

17) Et Al Brown a poussé jusqu'à ses limites extrêmes le génie de la boxe et du cœur. ( Cocteau, *ibid.*, p.106. )

18) Mon cher Al,

Il faut quitter la boxe, crois-moi. [...] Tu m'avais promis de reconquérir ton titre et je t'avais promis de t'aider jusqu'au bout dans cette étonnante entreprise. La chose est faite. [...] un poète voulait qu'un boxeur redevînt champion du monde. Redevenu champion du monde, l'entreprise cesse et le point final du poète sera le poing final du boxeur. ( Cocteau, *ibid.*, pp.106-107. )

19) Je l'ai soutenu. Soutenez-le. Je m'efface. Chacun son tour. ( Kihm; Sprigge; Behar, *Jean Cocteau, l'homme et les miroirs*, op.cit., p.248. )

20)この『円卓の騎士達』はコクトーが日本を訪れた際、ぜひ菊五郎に主演を頼みたいと語っていた劇であった。

21) Hausser les épaules en face de l'Acropole, du Sphinx, etc., c'est une attitude d'esthète, un snobisme auquel je me refuse. Je préfère celui qui consiste à louer ces vieux spectacles [...], et de chercher à les louer sous un angle neuf. ( Cocteau, *Tour du monde en 80 jours*, op.cit., p.220. )

22) Cocteau, *ibid.*, p.84 参照。

23) Notre entreprise devient très pénible en ce sens que nous ne voyons des lieux que la bordure et les moyens de transports. ( Cocteau, *ibid.*, p.86. )

24) [...] la beauté commence où s'arrête le guide. ( Cocteau, *ibid.*, p.91. )

25) Les coupe-gorge ont toujours été d'un accueil large, sans réserve, la meilleure place offerte. ( Cocteau, *ibid.*, p.121. )

26) Trop de luxe tue la création et nous accable de je ne sais quelle mélancolie. ( Cocteau, *ibid.*, p.226. )

27) De toutes ces formes utiles, de toutes ces matières et architectures qui servent, se dégage une beauté réelle – une beauté qui apparente le gratte-ciel Rockefeller aux Pyramides, aux Tours de Silence, à l'Acropole. ( Cocteau, *ibid.*, p.226. )

28) L'oisiveté, le loisir, le rêve n'existent pas à New York. La ville a perdu ce luxe. Cela rend le travail de l'esprit difficile [...]. ( Cocteau, *ibid.*, p.233. )

29) J'aime le fumier des villes. [...] Une ville propre est suspendue en l'air, en bas un égout, des poubelles et des caves dégoûtantes nourrissent ce charme géométrique et le sauvent de la mort. ( Cocteau, *ibid.*, p.226. )

30) Harlem c'est la chaudière de la machine et sa jeunesse noire qui trépigne, le charbon qui l'alimente et qui imprime le mouvement. ( Cocteau, *ibid.*, p.227. )

31) 『堀口大學全集』第6巻、299頁、「コクトオの見た日本」。

32) Cocteau, op.cit., p.167 参照。

33) POST-SCRIPTUM

[...] L'Europe n'a d'intensité que dans le vice, le crime. Hélas, sa vertu est platitude. La vertu intense est rare. C'est la vraie sainteté : celle du poète, de l'oriental.

[...] Une merveille de l'Orient c'est le vice vertueux ; la noblesse du vice ; son naturel. La vertu intense court les rues. Cela explique le respect du poète. Le poète : *Number One*.

Comment craindrait-on l'exactitude du poète dans un monde où le moindre détail de vêtement, d'hygiène, de coupe de cheveux, relève d'une syntaxe. Un poète respire, enfin, dans une ville orientale. Tout y est cortège ; en ordre et fou. ( Cocteau, ibid., p.198. )

## 文献

Jean Cocteau, *Tour du monde en 80 jours ( mon premier voyage )*, Gallimard, 1936 ( 邦訳 : 堀口大學訳 『僕の初旅 八十日間世界一周』 / 『ジャン・コクトー全集』第五巻、昭和六十二年、所収 )

Cocteau, *POESIE de JOURNALISME*, Pierre Belfond, 1973

Cocteau, *Oeuvres complètes*, Marguerat, 1946 ~ 1951, volume XI

Cocteau, *Oeuvres poétiques complètes*, Gallimard, 1999

Cocteau, *Lettres à Jean Marais*, Albin Michel, 1987 ( 邦訳 : 三好郁朗訳 『ジャン・マレーへの手紙』、東京創元社、平成六年 )

Kihm; Sprigge; Behar, *Jean Cocteau, l'homme et les miroirs*, Editions de la Table Ronde, 1968 ( 邦訳 : キム、スプリッジ、ベアール著・秋山和夫訳 『評伝ジャン・コクトー』、筑摩書房、平成七年 )

ジャン・コクトー 『ジャン・コクトー全集』、東京創元社、昭和六十二年、全八巻

コクトー著・東郷青児訳 『怖るべき子供たち』、白水社、昭和二十五年

コクトー著・東郷青児訳 『怖るべき子供たち』、角川書店、平成元年

コクトー著・秋山和夫訳 『占領下日記一九四二 - 一九四五』、筑摩書房、平成五年、全三巻

「詩と詩論 第二冊」、厚生閣書店、昭和三年十二月

「本の手帖 ジャン・コクトー追悼号」、昭森社、昭和三十八年十一月

「ユリイカ コクトー生誕百年特集号」、青土社、平成元年九月

- 堀口大學『堀口大學全集』、小澤書店、昭和五十六～六十三年、全九巻、補巻三、別巻一  
工藤美代子『黄昏の詩人 堀口大學とその父のこと』、マガジンハウス、平成十三年  
中村喜春『江戸っ子芸者中村喜春一代記・青春編』、朝日新聞社、平成五年  
佐藤朔『モダニズム今昔』、小澤書店、昭和六十二年  
佐藤朔『破壊と創造 - ジャン・コクトー芸術論』、昭和出版、昭和五十三年  
堀辰雄『堀辰雄全集』、筑摩書房、昭和五十三年、第四巻  
田中穰『評伝藤田嗣治』、芸術新聞社、昭和六十三年  
田中穰『藤田嗣治』、新潮社、昭和四十四年  
ユキ・デスノス『ユキの回想』、美術公論社、昭和五十四年  
「藤田嗣治展カタログ」、海龍社編、藤田嗣治展開催委員会出版、昭和五十二年  
林芙美子『林芙美子全集』、文泉堂出版、昭和五十二年、第十六巻  
今川英子編『林芙美子 巴里の恋 / 巴里の小遣ひ帳 一九三二年の日記 夫への手紙』、中央公論社、平成十三年  
『新潮日本文学アルバム 3 4 林芙美子』、新潮社、平成九年  
柳澤健『現代詩人全集第十二巻 柳澤健集』、新潮社、昭和五年  
海野弘『一九二〇年代の音楽』、音楽の友社、平成七年  
三島由紀夫『芸術断想』、ちくま文庫、平成七年  
「別冊幻想文学 澁澤龍彦スペシャル」、幻想文学出版局、昭和六十三年十月  
宇野千代『或る男の断面』、講談社、昭和五十九年  
田中穰『心淋しき巨人 東郷青児』、新潮社、昭和五十八年  
チャップリン『チャップリン自伝 栄光の日々』、新潮文庫、平成四年

\*参考となる書目は多岐にわたるため、ここでは拙稿「ジャン・コクトーの日本訪問(1)～(6)」の中で直接、引用または言及したもののみを掲載した。

**Abstract****The Visit of Jean Cocteau in Japan (6)**

Masaya NISHIKAWA

On May 22, 1936, Jean Cocteau set sail from Yokohama harbor after his visit in Japan. Before long his journey would be closed in Paris where he had started his travel around the world in 80 days.

This journey around the world was full of unexpected experiences. After the trip without respite from Europe to India, he visited several ports of Southeast Asia that seduced him with the scent of opium. Then he met Charlie Chaplin on a ship bound for Japan, and moved to the United States where he wrote some critical essays about the latest black culture and the machine civilization of New York.

When we reconsider his articles on Japan in the context of this journey around the world, we can understand his view on Japan more clearly. To be brief, for Cocteau Japan was the country of the rites and the order, where everything derived from one 'syntax (=ethical rule)' and poets were highly esteemed.